
デルタニア・クロニクル

志水円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

デルタニア・クロニクル

【Nコード】

N29310

【作者名】

志水円

【あらすじ】

アルステーデ大陸東部域を支配する神聖デルタニア王国。

大仰な名前と長い歴史しかない貧乏小国であるデルタニアには不思議な宮がある。

離宮「薔薇の宮」

代々高位の女性皇族が住まったこの宮には見事な中庭がある。

薔薇の咲き誇る中庭には、この宮を不思議たらしめる庭師が一人、住んでいた。

月梅の章 序章（前書き）

この作品はかつてアルカディアに投稿していたものを
改稿して投稿していきます

月梅の章 序章

第一巻 月梅の章

序章

「お、伯母上様、わ、私と…私と結婚してください」

開口一番、真剣な表情で少年が言い放ったのは時候の挨拶でもなければ、同行者の紹介でもなく求婚の言葉だった。

ゴトン！

少年に同行していた男が、カップを取り落とし、鈍い音が、室内に響く。

幸いカップは木製だったので割れることはなかったが、カップを満たしていた香草茶はぶちまけられ、精緻なレースが施された見事なテーブルクロスに染みを作った。

室内を重い沈黙が支配する。

そこに現れた召使と思しきの青年が、淡々とテーブルクロスを引っぺがし、布巾でテーブルを拭き退出する。

重い沈黙を破ったのは、プロポーズされた女性だった。

「断る」

聞く者を魅了する官能的なハスキーヴォイスが、少年の求婚を一言で切って捨てた。

すげない拒否の言葉に少年がうなだれる。

「俺を連れてきたのは、証人にするつもりか？マクシリアン、我が甥っ子殿」

ようやく我に帰った少年の同行者、先ほどカップを取り落とした

男は呆れた様子だった。

そんな男に再びカップが差し出される。男はそれを受け取り一口飲む。

冷たい香草茶はあまり好きではないのだが、さすがにこの状況ではありがたかった。

二口目で一気に飲み干し、ようやく人心地つく。

「うむ、この離宮では、うまい茶と菓子が供されると聞いていたが、たしかにうまい」

「ありがとうございます、お替りはいかがですか？」

「たのむよ」

先ほどの爆弾発言にも動じず、茶を入れ直して来た、召使の青年は一礼すると、カップを受け取り再び下がる。

男はよくできた召使だ、と感心する。

「うちの家にも一人ああいうのが欲しいなあ」

「召使なら、掃いて捨てるほどいるであろう」

「そうですね、遊学中のギルメニア王国王子であるエドワード伯父上」

「説明的なご紹介をありがとうよ、我が麗しの甥子殿。神聖デルタニア皇国次期皇王のマクシミリアン殿下」

エドワードは皮肉な口調で返すと、マクシミリアンはむっとした表情になるが、すぐにそれをひっこめた。

そしておもむろに、求婚した女性、父親の姉にあたる人物に泣きつく。

「月季様、このままでは私は幼女の嫁をもらうことになるのです、皇王位でさえ寝耳に水でしたことに加え、この仕打ちはあんまりではありませんか」

まだ十五歳の少年であるマクシミリアンが「幼女」などと言うからには、相手はまだ十にも満たないのだろう。

デルタニアの風習で男子の成人は十八歳だが、皇族に限って十五歳で成人する、今年成人するマクシミリアンに結婚話が出るのはお

かしなことではない。

（ちなみにデルタニア暦は、いわゆる太陰暦であり、慣習的に生まれ落ちた時から一歳とされ、さらには年が改まると、皆一斉に年を取る。

生まれ月の関係もありマクシミリンの満年齢は、我々に馴染みのある現代の数え方ならば、まだ十三歳でしかない。）

歳相応とも言うべき、甥の泣き言を、デルタニア皇女・紫月季は再び切って捨てる。

「仕打ちとは面妖な、至高の座に座る男子おのこの言い分とは思えんな」

「私の皇位継承権は第六位、本来なら皇位など継ぐような者ではありません」

マクシミリアンは先帝の弟であったが、先帝にはすでに二人も子供がいる。

近々臣籍降下し、断絶していた宮家を継ぐはずだったのだが、しかし……

「カストリア共和国の情勢が不穏、ではな……幼帝では戦のときに心許ない、実に妥当な判断よの」

カストリア共和国は五十年程前、大陸中で一世を風靡した市民革命。その最初の成功によって建国された国である。

非常に好戦的な国家で、周辺の君主制国家を次々と責め滅ぼし、大陸中央部最凶国家と名高い。

デルタニアとはギルメニア王国とデイトニア大公国を挟んでいるものの、ギルメニア、デイトニア両国はデルタニアを宗主国とする属国であり。事実上国境を接しているといっても過言ではない状態だった。

ここ数年、カストリアは建国に携わった人物たちが次々と死去し、国内でのトップ争いが表面化。国外に目を向ける余裕は無かったのだが、最近新たな指導者が立ち、国政を把握、自らの政争で荒廃した国状を、すべて周辺の君主制国家の責任と言い放ち、再び軍備を整えているというのだ。

「ですが本来であれば、貴方様がお着きになるべき椅子のはずです」
「玉座などに興味は無い」

月季は冷たい声音で言う。

「ですがっ！」

更に言い募ろうとしたマクシミリアンを、月季の冷たい視線が射抜いた。

蝋燭の薄暗い照明の中、紗のベール越しに爛と光る金色の瞳は異能の証、大の大人でも肝を冷やす月季の視線は、いまだローティーンであるマクシミリアンに恐怖を抱かせる。

ぞくりと冷たいモノを背中に感じたマクシミリアンは、息を呑んだ。

「私は三度玉座を蹴った、讓位など下らないことを言って、私を煩わせたりはしないねマクシミリアン？」

硬質な声音でそう言い聞かせ、ベール越しに微笑む月季だが、その笑みは恫喝の笑みであり、その言葉は有無を言わせぬ命令だった。ベール越しに見える、通った鼻梁と朱唇は確かに微笑している、しかしベールの奥に光る瞳は、「竜眼」の異名を取る金色の瞳。不興を買った男が、視線で射殺されたという噂まであるのだ。

恐怖のあまり、かたかたと震えながら、首を縦に振るマクシミリアンを眺め、エドワードは内心で呻いた、普段は毅然とし、年齢不相応な落ち着きをみせる甥をここまで追い込むとは……

「（おっかねえお人だ）」

「いい子だマクシミリアン、少し庭でも眺めてくるといい」

あくまで優しい口調で、だが否やは言わず、マクシミリアンを部屋から追い出すと、月季はエドワードを一瞥した。

「さて、詳しい話をお聞かせてもらおうか？」

「あれの即位に当たって、正妃をと言い出したのは宮内卿です」

「いかにも宮内卿の言い出しそうなことであるな、それになんの問題がある？年頃の姫など、売るほどおるだろうに」

「いえ、宮内卿は殿下の正妃は「真名」持ちでなくてはならぬと主

張、譲りませんでして」

月季はそれでも納得のいかぬ表情をしていた、男子ならともかく「真名」を持つ皇族の女子は一人や二人ではないはずだ。

「そうなるとマクシミリアンに似合いの、年頃の娘は少なかったな、白宮家に二人……だけか、そういうことが、ふむ」

月季は納得した、白宮家の現当主から嫁をもらうのは、自分に「了」と言わせるのと同じくらいに難しいことだった。

「蒼弦の馬鹿者のせいだな」

悪態と共に、月季の唇から深いため息が漏れた。

一方庭に追いやられたマクシミリアンは、満天の星空と柔らかな月光に照らされた見事な庭を、眺めることもなく、手にしたロケットを開き、はめ込まれた小さな肖像画を見つめていた。

深いため息と共にロケットを閉じると、金木犀の香に似た芳香に誘われ、ようやく庭を眺めた。

宮廷の造園された庭とは随分趣き違う、咲き誇る名も知らぬ幾種類もの季節の花々。

振り返れば、皇位継承権一位の公主が住むには、到底適しているとは思えない離宮。

周囲五里四方はすべて離宮の土地、その広さだけなら離宮としては小さいほうだろう。とはいえ土地の大半は手付かずの自然に囲まれ、一番近い人家は十里先の農村、物騒なことに塀はおるか柵すら無い。

そして月季が住むのは良く言えば庵、悪く言えば田舎屋、ぶつちやけてしまえば「小屋」だ。わずかに居間、寝室、台所、浴室、屋根裏部屋（召使の部屋）のみの平屋。マクシミリアンは最初「このあばら屋に国一番の女性が住まっている」とは到底信じられなかった。

召使は先ほどの青年だけらしく、風呂やら……し、下着などはどう

しているのか。

「殿下」

声を掛けられ、振り返る。召使の青年である。

「なにか」

少々恐れ多いことを考えていたマクシミリアンはドギマギしながら答えた。

「夜は冷えますので、どうぞこちらの東屋へ。お茶をお入れします」

「ああ、すまないな、ありがとう」

案内された東屋で湯気を上げる香草茶と菓子を出される。

「莊園の娘がくれた焼き菓子です、お口に合いますかどうですか…」

干し葡萄を使った、素朴な感じの焼き菓子である、柔らかく微笑んだマクシミリアンは躊躇わず口にする。

「いやうまい、私は砂糖の甘味が苦手ですね…丁度良い」

「お口に合いましたねによりです」

そういつて青年はマクシミリアンの後ろに控える。

残念ながら話し相手にはなってくれぬようだ。

三つ目の焼き菓子を齧りながら、マクシミリアンはぼつりとつぶやいた。

「砂糖など簡単には手に入らぬのだから、当たり前か…」

砂糖は大陸西方の特産品であり、東部では贅沢品である。

都市部や主要街道沿いの町や村ならば手に入れる機会もあるだろうが、普通の農村では売っているところなど無い。

「折角王になるのだ、贅沢禁止令でも出して砂糖を規制するか」

むろん冗談である、実のところ王になることが嫌なのではない、継承権こそ低いもののマクシミリオンも王家の男子である、覚悟はあった。

いまだ成人もしてない、形だけの后を迎えることがどうにも耐え難いのだ。

理由は幾つかある。

一つは先々代の正妃、つまりマクシミリリアの父の正妃のことだ

った。

先々代の即位の時、真名持ちの女性皇族が極端に少なく、数少ない女性皇族は皆、王太子の従姉妹か姉妹であった。

先々代の父と母が従姉弟同士だったため、あまりに血が濃くなりすぎる、と彼女らとの結婚は認められなかった。

ただ一人、白宮家の娘だけが王の又従姉妹と、もつとも遠縁だったため、宮廷会議は大揉めの末に、その娘を正妃として王へと嫁がせたのだが…

「父はあの方にとても優しくしていたけど…愛してはいなかった」

先々代の在位は共和革命後の戦乱状態が続き、王は在位のほとんどを戦場で過ごした。

内政は白宮家の若き当主であった現宰相に任せきりで、ほとんど首都には帰ってこなかった。

無論これは戦場に王があつて、指揮を鼓舞すること、王が率いる近衛軍を戦線に投入するため、と色々理由があつたが、最大の理由は王自身が、戦争が大好きだったからであつた。

正妃は首都の王城で王の帰りをいつも待つていたが、王は国境の城塞にあつて精々年に数日、どうにも外せない政務、儀式の類の時しか帰ってくることは無かつたのだ。

ほとんど奇跡のように正妃との間に子は生まれたが、女兒の上体が弱く、生まれてすぐ、霊地である副首都で養育されることとなった、王がいない分正妃が首都を離れることは許されず、正妃は随分と寂しい生活を王城で送っていた。

マクシミリアンも先王であるマクシミリアンの兄も、側室の子である、マクシミリアンの母は左近衛後將軍、王に心酔し、また王も彼女を愛していた…のではないかと思う。

何せマクシミンの母は産後まもなく將軍職に復帰し、マクシミアンはほとんど、父と母と会話をしたことも無ければ、そもそも

顔を会わせた回数が数えられる程度しかないのだ。

「ふざけた話だと思わないかい？近衛の女將軍というのは本来、王の妃を護ることが最大の務めなのだよ、後宮での帯剣も許されている、それが…」

まるで互いを慰めるように、マクシミリアンは正妃を母と慕い、正妃は憎いはずの女の息子を、実の子のように慈しんでくれた。

そんな過去のせいだろうか、マクシミリアンは形だけの結婚に生理的嫌悪感をぬぐえず…何より、マクシミリアンにはすでに心に決めた、互いに誓い合った女性がいるのだった。

おそらく彼女を娶ることは、とても難しい、たぶん月季に首を縦に降らせることと同じ程度にだ。

だが、それでもマクシミリアンは伯母との結婚しかない、と思っていた。

月季は龍神の巫女である、つまり月季と結婚しても、それは形だけの夫婦でしかない。

巫女は神の花嫁であり、彼女を現実世界で「皇后」として娶ることが許されるのは、竜神教団の法皇を兼務するデルタニア皇王だけ、しかしそれは儀式めいた関係であり、王は子孫を残すために「正妃」を娶ることが許される。いやその必要が有る。

そして王になってしまえば、王命として彼女を娶ることが可能なのだ。

たとえば彼女が真名持ちではないとしても、マクシミリアンには文句のつけようの無い「皇后」がいるのだから…

「マクシミリアン様…」

「ありがとうございます、人に話してすこしすっきりしたよ」

「左様でございますか」

「君は元竜騎士かい？雰囲気は良く似ているよ。あの世界で最も凶

暴な生物を『たらしこむ』彼らに。ついついこんな話をして、すまなかつたね」

空のカップに茶を注ぐ男に、マクシミリアンはらしからぬ下品な物言いをする。

召使の男は「恐れ多いことです」と表情を変えずに言ったのだつた。

第二章 庭師姫

咲き誇る薔薇の庭園に、庭師のような格好した少女が一人、花壇の前にしゃがみこみ、せつせと薔薇の世話をしている。

日除けの麦藁帽子からこぼれる、豊かな髪、切れ長の瞳に、通った鼻梁、細いおとがい…美しい少女だ。

がしかし、どこか不敵な笑みを浮かべた表情が、その繊細な美貌を台無しにしていた。挙句…

「このくされ薔薇め、今度こそ血のように真っ黒に咲かせて見せるぞ…くそ、なんだその勝ち誇ったようなピンク色は」

耳を疑うような物騒な物言いがその唇からもれる。

薔薇園に咲くは薔薇は、見渡す限りピンク色だ。

「百歩譲って黄色も可だ。黄薔薇の花言葉は『冷めた愛情』。ふふ、奴に送るには良いかもしれん…よし次の目標は黄色だな、庭師に相談に行こう」

黄色い薔薇は咲かせるのが難しい、少女は師と仰ぐ庭師に素直に相談することにした。

立ち上がり、膝についた土を払った少女は、庭師小屋へと向かうとした、しかしそれは果たせずに終わる。「殿下！殿下！」という声と共に、一人の老人が血相を変えて、こちらに駆け寄ってきた。老人は、少女にとっては家族のように親しい人物だった。

「侍従長、血相変えて走り回るなんて、どうしたのだ？」

必死に息を整えた老人…少女の住まう「白陽離宮」の侍従長ビクトル・アルベルト・ルドラウド。通称ビクターはようやく口を開く。「殿下、落ち着いて聞いてくださいなれ」

「なんだ、まさかお祖父様がくたばったのか？」

いつもの軽口、しかし侍従長はその軽口を窘める余裕すらない様だ、さしもの少女も訝しげに首を傾げる。

「ビクター？」

「陛下が、戦死なされました」

しばらくだすように侍従長は言った。しかし少女は驚きもせず、その麗しい眉間にしわを寄せた

「はあ？バカ兄貴は確かナバルの蛮族と戦争中だろうか？」

少女は冷静にビクターに問うた、淡々と。到底兄が死んだと言われた妹の態度ではない。

「その戦場で」

戦死というからには、戦場で死んだのだろう。

しかし少女の知るこの国の王を守る軍隊は、それほど無能ではない。

「わかった、ようするにあの馬鹿兄貴はとうとう嫌気が指したのだな」

得心した、と言わんばかりに少女は断言すると、深く深くため息を吐いた。

「で、殿下！」

「戦死ではなく行方知れずなのだろうか？ビクター。まあ戦場で行方知れずならば死んだも同然か」

少女は再び嘆息する。

父親に続けて兄も出奔、情けなくて涙が出そうである。

少女の父親であった紫貴王は無類の戦争好きで、国が平和になつたとたん、王位を放棄、近衛騎士の一部を引き連れ出奔、いまは戦乱途絶えぬ大陸西部で傭兵団を営んでいるという。

伯母月季が数度暗殺者を送り込んだ、などという、えらく真実味のある噂もある。

そして馬鹿兄貴こと当代の皇王蒼弦王は父を輪に賭けダメ王だった。

戦だけならともかく色、酒、博打を好み、政務はほぼ判子を押しだけ。

（それでも機能してしまう、デルタニアの官僚組織にも問題はあるのだが）

王弟マクシミリアンが無礼打ちも覚悟で、たびたび諫めていたが、効果も無く、逆にマクシミリアンを疎み、宮廷への出入りを禁止する有様だった。

「どうせ近衛軍の將軍達も一緒だろう？様するにあれか駆け落ちか」
びくりとビクターの身体が震える、近衛軍の將軍達は、兄の信奉者：というか女將軍は愛人達である、当然ついていったはずだ。

容姿端麗、頭脳明晰、一騎当千、才色兼備の逸材ばかりだが、最大の欠点はあの馬鹿王に心酔していることだ。

そして馬鹿王もとにかく戦だけは天才的だった、毎年のように来寇する、北部の蛮族、辺境域の妖魔、ついでにことあるごとにいちやもんをつけてくる西側の共和国。全て一蹴するだけの才覚の持ち主だったのだ。

近衛の將軍達はその戦の才と王の雄としての魅力にメロメロだった。

そしてその中にはビクターの孫がいる。

何を隠そう少女の婚約者でもある男だ。

「殿下、孫のことは…」

冷や汗を流し、そうもらずビクターに非は無い。少女はニコリと笑みを浮かべ「気にするな」とビクターに言う。

「で、殿下どうか、どうか」

長年の経験から、少女の笑みにただならぬものを感じたビクターは、必死に弁解しようとするが、舌はもつれ言葉は意味を為さず、ただ「どうかどうか…」と繰り返すばかりだ。

「もう良いビクター。そんなことよりも、マクシミリアン兄上の心痛を考えると、こちらの胸まで苦しくなるな」

「はっ…」

少女の母である先代正妃を母と慕い。軽々しく首都を離れられぬ母に代わり、頻繁に白陽に足を運び、自分を慈しんでくれた兄。(もともとマクシミリアンの少々過剰な愛情は、実の両親への憎悪、その反動だと少女は思っていたのだが)

蒼弦の言動が年々に父に似ているにも、ひどく心を痛めていた。先王の子供三人の中では、も王に相応しい人物だった。しかしマクシミリアンは真名を持たなかった。

双貴の相を持つものを王に、などというかび臭い制度は、血が薄まり太祖の形質を持たぬ王族多い今の時代にそぐわぬものとなっている。

実際に五百年程前には王位を巡り、内乱になりかけたこともあった。

とはいえ建国以来の法を曲げることも出来ず、昨今では、慣例として、真名持ちの宮家の子女は、皇王位の継承権を放棄するようになった。

第二位を保持する叔父英月も、同様に継承権を放棄しようとしたが、金の瞳を持つものが稀であるため、これは宮廷会議によって却下されてしまった。

だが、王位を先王の息子に優先的に譲ること、に関しては無用な政争を回避するために許可された。本来ならば、放棄しているはずの継承権を無理矢理保持させている都合上、これには宮内省も強くは出れず、また英月という優秀な宰相をデルタニアの官僚組織が手放すのを嫌がったこともあり。英月が王位につくことは無かった。そして伯母月季は三度玉座を蹴った、そしてたぶん四度目も蹴らるだろう。

龍神の巫女たる齋の宮の条件は、完璧なる双貴の相の持ち主であること。

とりもなおさず現代においては、齋の宮は常に継承権第一位を保持し続けることになる（放棄は当然許可が下りない）、がしかし過去において齋の宮が、齋の宮のまま王位を継承したことはない。

齋の宮が王位を継承するには、巫女の位を降りる必要が有るのだ。

だが、近年において、双貴の相を持つもの生まれるのは百年に一度有るか無いか、そのため齋の宮の退位など、今度は龍神教団から許可が下りないのである。

端的言ってしまったえば、皇王は替えが効くが、斎の宮は効かない。そして昔ならいざ知らず、現在のデルタニアには教団の機嫌を損ねて、平気な顔をしている余裕がまったく無いのである。

「（この白陽から…いや離宮から出るのでさえやっこのこの身や、年端もいかぬ甥姪より兄上の継承順位が低いとはな）」

少女は再び深く嘆息した。

「殿下！一大事でござる」

空気を振るわず大音声、あまりのやかましさに少女は思わず耳を押さえる。

「ダニエル！この至近距離で大声で話すないつも言っているだろう！」

耳を押さえながらも怒鳴り返す。

大声の主は軍務官僚のダニエル・ドリストロンだ。一応文官のはずのだが、どうみても軍人にしか見えない男である。

その後には小柄な老人、前宰相にして現在は少女の師である。ヨ―ゼフ・アウストロメリアがいる。

「今年はまだ一段と華やかな薔薇園でございますな殿下」

「ああ：本当は別の色の薔薇が咲く予定だったのだがな」

「ガーデニングなどしている場合ではございませんぞ王妹殿下。ナバルの蛮族どもの北部域侵攻の対処をせねば！」

デルタニアの北方群島に位置する国家ナバルは、北の蛮族達の連合国家である、好戦的な連中で、年に一回はデルタニアに攻め込んでくる。

「まったくナバルのバーバリアンはきりががないな」

「陛下は無く、黒珠は混乱中、北部域のことなれば白陽府が対応せねばなりません」

「わかったわかった、判子押し…いや王族の義務ぐらいいは果たす。だがなあダニエル、私は王にはならんぞ？」

ダニエルの眉がぴくりと動く。

「怖い顔をして無駄だ、私は可愛い甥っ子や敬愛する兄上と王位

争いなどする気は無いぞ」

「はっ、殿下のお気持ちは重々承知しております。しかし」

「くどいぞダニエル、この白陽からまともに出ることもできない、そんな王はまっぴらだろっ」

言い募ろうとした軍務官僚を少女は叱責する。冷めた瞳で見上げられたダニエルは、ぎくりと強張る。

ダニエルは内心で呻く。

「（おしい…このお方は王者の相をお持ちだというのに）」

少女の見事な金髪は斎の宮たる伯母月季に劣るものではない。なにより彼女の政治家としての才覚は兄に劣るものではないのだ。

そんな期待の籠った眼差しに、デルタニアの王妹、月梅は心底「面倒だ」という顔をしながらも「いくぞ」と言い、三人の臣下を引き連れ会議の間に向かうことにした。

第三章　会議は踊る

神聖デルタニア皇国は、大陸の中央部いわゆる中原地方の東側と大陸東部のほぼ全域にあたる「辺境」を領土に持つ、大陸で最大の版図を誇る国家であり。そして最古の国家でもある、その歴史は古く、大陸に現存する王家としては最も由緒正しき王家だと評判であった。

がしかし「辺境」の大部分は人跡未踏の樹海、湿地、荒野、山岳地帯であり、長い歴史の中で開拓された部分を含めても、実質的な領土は小国と呼ぶ規模でしかない。

神聖デルタニア皇国首都、黒珠。

「青の宮」は皇宮の大部分を占める宮で、政の宮まつらである。会議の間に集った重臣達は、ある議題に頭悩ませていた。

まずことの起こりは、王が出奔したことである。

先王である蒼弦王は、近年まれに見る昏君であったが、戦いくさだけは得意であった。

北方の蛮族、東方の妖魔、西方の敵国と、三方から度々攻められているデルタニアとしては、ありがたい存在であった。

その王が戦死した。

まあ正確には王は王としての職務を放棄し、近衛の將軍達を引き連れいずこかへ出奔したのだが、あまりに外聞が悪く、諸外国へのメンツもあり、表向きは先王は戦死した事になっていた。

普通ならば前代未聞のはずなのだが、ここ何代か同じように国を出奔する王が後を断たず、いい加減慣れてしまったのか、王族や重臣たちは慌てず騒がず、次の王を即位させることとなったのだ、そこまではよかった。

先王にはまだ幼い子供達がいたが、隣国の情勢が不穏ということもあり、繰り上がりで王弟マクシミアンが来月即位する。これは

決定事項であり、ことさら悩む問題ではなかった。しかし…

「成人した男子が即位の際に正妃がいないなど、認められません。未婚ならば妻を娶る、それが典範にも明記されている、皇国の『しきたり』でございます」

若い宮内卿はそう言い放つと、目を閉じ押し黙った。一步の妥協も無いという態度である。

デルタニア皇王は王太子のうちに妻を娶り。即位に際し正妻が正妃となる。未婚の場合まず結婚式があり、その後即位するというのが“伝統”だった。

重臣達が頭を悩ませているのは、本日の議題、新皇王の結婚相手だった。

王弟マクシミリアン。デルタニア独特の風習である「真名」を持たぬ皇子である。

母親が同じということもあり、容姿も背格好も良く似た兄弟だったが（先王の方が年長だったため、同年代の頃の話であるが）、皇弟マクシミリアンはライトブラウンの髪に水色の瞳、先帝は金髪に水色の瞳の持ち主だった。

面白いことに、デルタニア皇王の継承権は年齢、性別、母親の身分よりも髪と瞳の色が優先される。

それは金髪か金の瞳。

それがデルタニア皇王の条件なのだ。大陸において、金髪金の瞳を持つ民族は存在せず。唯一、デルタニア皇室の太祖双貴帝が備えていた形質であったと伝えられている。この形質を受け継いだ皇族は「真名」と呼ばれる古代文字の名を持つこととなる。

長すぎる歴史の中で血は薄まり、昨今では金髪はともかく、金の瞳を持つ皇族はほとんどおらず。金髪かそれに極めて近い色合いの持ち主ならば、真名持ちとされてきた。

しかし金の瞳を持たない王は暗君が多く、王を罷免する権利を持つ、守護神たる龍神の「斎の巫子」の「託宣」によって罷免された

王も多い。

結果としてバカはしないが良政もとならない凡庸な王が続き、デルタニアは少しずつ衰退していると言っても過言ではない情勢であった。

しかもここ数代は駆け落ちだの、出奔だのといった醜聞が続いており、なおさらその感が強い。

そのためか多少母親の身分が低かろうと、傍流の家系であろうと金の瞳を持つ者に皇位を継がせたい、というのが重臣達の声に出せぬ願望であった。

父親から金髪を受け継がなかったマクシミリアンの皇位継承権は第六位。

しかし第一位の伯母月季は、斎の巫女であるため、慣習通り皇位継承を拒否。

第二位の皇家の分家筋である白宮家当主は皇位継承権を放棄することを宣誓。

先も述べたとおり三位の甥、四位の姪、はあまりに幼く、五位の妹は皇家特有の特家異体質で体が弱く、副都白陽のような清浄な所から出られない。

そして隣国カストリア共和国の不穏な情勢が、マクシミリアンの皇位継承を実現させた。

過去にも、似たような事情で（戦時中など）、金髪金の瞳を持たぬ皇帝が即位したことは幾度もあった。がしかし、皇位の継承に際し、金の瞳の持ち主を四名もすつとばしたのは、まさしく前代未聞だった。

「そして、陛下が真名をお持ちではない以上、当然真名をお持ちの姫君を迎えるべきです」

宮内卿は断言する、普段の政務にはほとんど権限のない宮内卿だが、こと皇家に関する権限は絶大である、カビの生えたような「し

きたり」を遂行することに関しては全権を持っている。

なお先王の出奔後、マクシミリアンは代王として既に政務についており、事実上王座に就いている、正式な即位はまだだが、すでに彼は陛下と呼ばれる身分なのである。

ただのこの御前会議には断固として出席を拒否、現在玉座には誰も座っていない。

強硬な宮内卿の態度に、大臣達はどうしたものかと、心当たりの姫君達を挙げていく。

「陛下に年の会う姫君となるとむずかしいのお」

最長老の工部卿がもらす。

「セラス様のご息女桜花様ではいかがかな？」

外務卿が提案する、セラスは先々代（マクシミリアンの父）紫貴王の従姉妹で、桜花はマクシミリアンには再従姉妹にあたる。

「御年六歳ではちと幼すぎましよう」

内務卿が反論し、代わりの名前を挙げる。

「マリア様のご息女、菊花様などいかがであろう、年も…割合近いし、成人しておるしな」

マリアはマクシミリアンの祖父、火月王の末の妹。菊花はそのマリアが最後に生んだ娘である。

「九つも年上ではないか。それは近いとは言えんだらう」

いまだ三十台半ばでその役職を務める財務卿が苦い顔をする。

デルタニアでは男子の成人は十八で結婚も成人後だが、女子は十台半ばで結婚することは珍しくもなんともない、しかし菊花はすでに二十六歳、少々歳を取りすぎているということになる。（彼女は不幸にも嫁ぐ直前に婚約者を亡くし、以来どこにも嫁がないで居る）

「おや財務卿、経験者は語るでござるかな？」

日頃から仲の悪い兵部卿がからかう、姉さん女の尻に敷かれているという財務卿の恐妻家ぶりは有名な話である。

「聞き捨てなりませんな兵部卿、貴君こそ一回りも年下の嫁をもらって、どうかと思うが？」

なんですと！と叫んだ兵部卿が立ち上がり、財務卿に詰め寄る、あわや会議中に乱闘かと思われたが、それまで沈黙していた上座の人物が口を開いた。

「控えよ」

宰相宮、白英月。

「宮家」と呼ばれる皇室の血を引くやんごとなき家の当主であり、先々代の在位から若くして臣下のトップである宰相の地位に就いている。

ごく淡いが金の瞳の持ち主であり、皇位継承権第二位であったが、此度の皇位継承を辞退、そして継承権自体を放棄している。

その宰相の一言に財務卿と兵部卿はギクリ、と凍りつく

デルタニアには「貴族」というものが存在しない、血統によって支配層にあるのは皇家とその分家である宮家だけである。その宮家にしても皇家の血筋が薄くなりすぎると宮家を名乗ることは許されなくなる。

貴族いない理由は単純で、分け与えるほどの領土が無いからである。

他国であれば宮廷で重要な地位に就くのは貴族が多いが、そんな事情もあって、デルタニアは大臣達もすべて役人である。官吏登用試験を優秀な成績で突破した者達が今ここにいる大臣達である。それは宮家の当主たる英月も例外ではない。

官吏登用試験の同期で、出世競争のライバルである財務卿と兵部卿は、やはり同期であるこの宰相がすこぶる苦手だった。若いころに色々あったらしい、とまれ蛇に睨まれた蛙のように縮こまり二人は席についた。

「宮内卿」

「はい」

「陛下の嫁の心配など我々がする必要は無い、すでに方々に打診しておいた、即位には間に合わんが万事準備だけしておけ」

「ですがそれでは」

「いまはカストリアがきな臭い上にナバルの蛮族も不穏だ、戦時とまでは言わんが、平時でもない。これまでも少なからず有った事だ」それは決定事項と言わんばかりの宰相の態度、しかし宮内卿も譲らない。

「そのような情勢での先王陛下の戦死で、民も不安に思っておりまず、まずは殿下のご成婚、そして陛下として即位、さらに正式な立后式と慶事が続けば」

「そんな金は無い、そうではないか？財務卿」

「宰相殿のおっしゃるとおりです」

「皇家の予算で工面いたします」

食い下がる宮内卿に今度は兵部卿から待ったがかかる、皇家の予算が圧迫すると、皇家の私兵扱いであり皇家の予算で運営している近衛の軍事力が低下するから困る、とのことだった。

さしもの宮内卿も宰相、財務卿、軍務卿全てを敵に回しつっぱりきることは出来無かつたらしい。

渋々ではあったが、宰相の案を呑むことを承諾する。

その後会議は肅々と進み、終了と同時に宰相は席を立ち、退室する。

後には大臣達だけが残された。

「やれやれ宰相殿のお怒りは深いようですな」

財務卿は嘆息した。

「ご息女も、末の妹君も、年齢的には、ばっちり殿下にお似合いですからな」

外務卿が言う。

「とはいえ、それを言い出せぬ我等も中々に情けないですな」兵部卿はいかにも情けなさそうに言う。

「しかし怖い」

「そうあの金の瞳がな」

「私もその件に関しては、少々命が惜しゅうございます」

仕事のためなら命も捨てそうな宮内卿までも賛同する。

「しかしどうなさるおつもりなのか」

「宰相の宮様にはお考えがあるようじゃ、信じて待つ他なかる」

最長老である工部卿がまとめたが、返事は無い、ただ沈黙が議場を支配した

「情けなき話だな」

嫌な沈黙を破ったのはドアが開かれる音と、皮肉に満ちた女性の声だった。

「齋の宮様！」

「月季様ではござらぬか！」

突然の闖入者に重臣一同が驚きの声を上げる。宮廷を毛嫌いし、三度玉座を蹴った皇女。月季が王宮にやってくるのは辺境の砂漠に雪が降る如き珍事である。

「これだけの人数をそろえて英月一人に敵わぬとは……この国に行く末が心配だな」

月季の手は宰相の襟首を掴んでおり、捕らわれた宰相が実に不快な表情をしていた。

「宰相殿！」

「まさか聞かれて？」

「ひ、ひい」

「神よ！」

先ほどの話を聞かれていたと悟った重臣達はパニックに陥った、ひたすら縮こまるもの、神に助けを求めるもの、務卿と兵部卿に至っては恐怖のあまり失神している。

月季は本気で「本当にこんな連中に国を任せておいて大丈夫なのか？」と呟く。

嘆息しつつ、つかつかと議場の上座に向かう。

「宮様？」

比較的冷静を保っている宮内卿が怪訝な表情する。

月季は無視して、玉座に……座った。

齋の宮には玉座に座る……どこるか足蹴にする権利まで、きち

んと明文化されている。四代皇王の姉であった、二代目の斎の巫女がわざわざ制定したものだ。

「至高の座などというが、あまり座り心地の良くない椅子だな、えらくあちこち傷んでいるし」

ぶつくさと文句を言いながら、一同を睥睨し凜とした声で宣言する。

「斎の宮として神勅を下す！」

月季の宣誓に、パニック状態だった大臣達の表情が引き締まる、宰相もである。

金の瞳を爛と輝かせながら、月季は勅を下す。

「皇王には真名を持つ紅星を、これは神勅である、否やは無い」

先王の一子紅星は淡いが金の瞳を持っている、しかしいまだ五歳の幼児である。

「マクシミリアンを摂政とし、宰相以下臣達は王を助け事に当たれ…繰り返す、これは『神勅』だ」

宮内卿と英月を一瞥した月季は「神勅」を強調して繰り返す。

一同が頭を垂れた。

月季は金の髪と金の瞳を持つ皇族。先祖帰りの異能を持ち、龍神に仕える「斎の宮」である。その権限は絶大であり、条件によっては王の罷免権を行使できるほどである。

「何かあれば離宮を訪ねるが良い。私も私の役割を果たそうぞ」

一切の質問を許さず、言いたいことを言った月季は議場を去る。その表情は苦々しい。

「英月、話がある」

無視して踵を返そうとした宰相を再び拘束する。

「逃げるな、暴れるな」

そう言っただけで暴れる宰相を拘束し、議場を後にしたのだった。

騒然とする議場を後にし、王宮内にある小さな中庭の東屋まで来

ると、ようやく拘束していた宰相を放す、黒髪の召使の青年によつてすでに茶の準備が出来ていた。

椅子に座った月季はカップを取ると一気に飲み干す。

「宰相、そなたの娘には悪いことをした」

月季が謝罪の言葉を述べる。

「私は自分の役割を放棄していた。恨んでよいぞ」

「お気遣いを感謝いたします。しかし私が生きているうちは、白宮家から王家に嫁を出すつもりはありませんので」

立ったままの宰相はきつぱりと言う。

「馬鹿弟と馬鹿甥のことは私が頭を下げてても良い」

先王の正妃も先々代の正妃も白宮家の人間、英月の長女と姉である。

先々王の出奔もかなり腹に据えかねていたようだったが、此度の王の出奔を聞いた英月の怒りは海より深い。

もとより溺愛していた娘だ。

最初に報告を受けた際「私の娘の何が気に食わないというのだ」

そう言い、椅子の肘掛を握りつぶした。との目撃証言もある。（ちなみに、目撃者はたまたま居合わせた兵部卿であり、恐怖のあまり

彼はその場で泡吹いて気絶した。）

「あなたの土下座などいらぬ！」

「だれも土下座するなど言っておらんわ！この頑固者！」

王の罷免権を持つ龍神の巫女が頭を下げる。そういつてもなお繰り返す英月に怒鳴り返す月季、すつと差し出されたカップを掴むとグイっと一気に飲む。

少し落ち着いたのか、カップを置くと、にやつと笑う。

「だが英月、そなたの末の娘とマクシミリアンは、随分仲が良いそうではないか」

にやにやと笑いながら（とても最高位の巫子には見えない様子だった）立ち上がった月季は、英月の首根っこ掴むと、顔を寄せて囁く様に言う。

「そなたが私に愛の告白をした時のこと覚えておるか？」

「幼子の戯言など覚えておりませぬ、放しなされませ！」

眉間にしわを寄せた英月は、月季を振りほどこうとするが、さすがに本気は出せぬ上に、女性とは思えぬ怪力で英月をホールドしている。月季はびくともしない。

「そうか、私は覚えているぞ、そなたは私が『父も大叔父上も許さぬでしょう』と健気っぽく言ったら」

「それ以上言うと、本気で怒りますよ」

「おお怖いな、だが：しかしマクシミリアンは良い子だぞ、知恵も回る」

そう言って笑った月季は、マクシミリアンが月季に求婚したことを、英月に告げた。

「恐ろしい子供だ」

英月は思わずそう漏らした。

何よりも月季に求婚する度胸。

そうすることによって自らの望んだ娘を手に入れる決意。

「危うく娘を横暴な王に召し上げられる所でした」

「いいではないか、そなたの末娘もマクシミリアンを好いているのだらう？血統も問題ない、くれてやれ」

「猫の子供のように言うのやめていたください」

「ははは、だかもう遅いぞ？足止めは十分したしな」

「何をなされた」

なんでもないように月季は「そなたの末娘には既にマクシミリアンが王にならんことを伝えた、ついでに白陽の神殿の紹介状をくれてやった」と笑いながら言う。

英月の顔から血の気が引く、それは当然の怒りのためである。

「なんとということをしてくれたのです！貴女は」

「ふん、いつだって私はな女子お嬢の味方だよ英月」

副都白陽、別名を聖都神殿都市白陽、2000年程前まではデルタニアの首都であった、現在も龍神教団の本部がおかれ、多くの歴史

的神殿が存在する。

その中には極東の島国ヤシマでいうところの「駆け込み寺」的な神殿がある。

自治権を持つ教団内部にあっても、さらに強固な不可侵権を持っており、特に女性信者の「駆け込み」が多いのである。

「ふふん、明日には神殿でマクシミリアンと結婚式よの」

白陽までは早馬でも2日はかかるが、月季は子飼いの竜騎士に命じて、既にマクシミリアンと英月の末娘を白陽へ向かわせたと言う。「そのような勝手な結婚は許されませぬ！」

「神前の誓いだぞ、たとえ父親でも覆すのは無理だ、それにアンリエッタは承知したぞ」

英月の妻アンリエッタは「マクシミリアン様ならば、この娘を不幸にはいたしませんわね」と泣き笑いで言いながら、娘に付き添い白陽へついていった。

「なあ英月、許してやれ、あんなことが無ければ、元々マクシミリアンにくれてやるつもりだったのだろう？」

青宮家を継ぐ予定のマクシミリアンだったが、一方では英月が女婿にと望んでいたのは事実だった。

マクシミリアンは英月にとってつは又従兄弟の先々代の息子であるが、先々代の正妃である英月の姉はマクシミリアンを実の息子のように愛し、またマクシミリアンも正妃を実の母のように慕っていた。

英月も甥っ子として可愛がり、幼い頃よりその才を見抜き、これといって後ろ盾の無いマクシミリアンの後見をしてきたのは、ほかならぬ英月だったのだ。

おそらく月季に殴りかからぬようにと、握り締めていた椅子の肘掛が、メキメキという異音と共に握りつぶされる。

それを見た月季はもう十分と判断したのか、召使の青年に合図をする。

「アルフォンスを用意してある、そなたも白陽に向かうが良いだろ

う

竜騎士でも最速と名高い男の名を告げ、月季は英月を残して中庭を去ろうとする。

「両親に祝福されぬ結婚は悲しいぞ英月、悪いのは我が弟と我が甥だが、マクシミリアンにはかわりの無いことだ」

「婚姻は皇族の義務の一環でございます」

「ふん、玉座に座らぬ我らが言えたことでは無いだろう」

皇位継承者としての最大の義務を放棄している二人は、苦く笑うしかなかった。

第四章　庭師姫の憂鬱

「さて黒狼。私が何を言いたいかわかるかな？」

白陽離宮の一角にある小さな温室。

デルタニアの王妹月梅は、離宮の庭師黒狼にここ数日のごたごたを話して聞かせていた。

兄王蒼弦戦死の偽報、真実、呆れる廷臣、官僚達。

王位は多少揉めた後、次兄マクシミリアンが継ぐことになった。

宰相である叔父白英月は、宮内省を完全に押さえ込み王位継承権の放棄に成功。

案の定、斎の宮たる伯母月季は玉座を蹴った。

もつともこれはマクシミリアンより高位の継承者達（つまり真名持ちの甥姪妹）が成人するまでの応急処置といった風情で、マクシミリアン本人もそのつもりのようにだった。

月梅の住まう離宮、通称「薔薇の宮」は、最初の女皇王である二代皇王が自分のプライベート用に造営した宮である。

以来幾度も主を代えたが、基本的に女性の王族が住まいとしてきた。

今から二百年ほど前。

当時の暗愚な王が、王弟に西側国境の土地を割譲し独立させた。

次代の益暗な王も、なぜかそれに習い、功績のあった一人の将軍に土地を与えそこに国を作らせた。それが現在のデイトニア大公国とギルメニア王国である。

こうして、中原の領土の過半を失ったデルタニアは、由緒はともかく、一気に大陸でも有数の小国になってしまったのだ。

そして次に即位した王が戴冠式後、最初の臣下への謁見で宣言し

たのが、白陽から東へ、現在の首都黒珠への遷都だった。

白陽から隣国となったデイトニアへは徒歩で一日、あまりに首都が国境に近すぎたのだ。

その王は王冠で玉座をぶったたきながら叫んだと言う。

「先代も先々代も頭に花でも咲いているのか！」と…（当時齋の宮は空位だった）

ちなみに王の暴走を止められなかった大臣達は残らず罷免なつた、と記録されている。

（後の共和国騒乱時には怪我の功名で国境を接することを避けられたものの、同盟の宗主国として戦争参加は避けられなかった）

ともあれ、以来白陽は副都として、

残された龍神教団の本部のお膝元、聖都神殿都市として、デルタニア北西部の地方府所在地として、発展してきた。

白陽離宮はかつての王宮だが、維持に莫大な金が掛かるため、現存するのは薔薇の宮とかつて王の離宮であった牡丹の宮など一部だけで、

政の宮は現在白陽府として再利用され、後宮は残っていない。

「薔薇」の通称は大陸において「花々の女王」と称されるゆえ、大陸においてももっとも高貴な女性が住まい続けたことに由来すると言われているが、実際には二代皇王が造園させた中庭の薔薇園の見事さが先だったと言われている。

その中庭は専属の庭師一族が代々管理しており、主の許し無く、勝手に立ち入れば死罪とされる「秘密の花園」である。

(ちなみに王の離宮「牡丹の宮」の名は、牡丹が「百花の王」と呼ばれているのが所以である。)

そしてその庭園を一人で管理する黒狼は、現在の宮の主…「庭師姫」の異名をもつ月梅の良き友人、良き師である。

その黒狼は、ときおり気の無い様子で相槌を打つだけで、のんびりと茶を啜る。月梅の話しが終り、問いかけられた黒狼は困った様子で頭を掻いた。

「姫様、しがない庭師に、戦や政の話をされても困りますよ」

「ふん、愚痴ぐらい言わせる。私はお前の主だぞ」

「おやおや」

自分で適当に淹れた茶に、ブランドーをどばどばと流し込み、ぐいっと月梅はあおった。

「まったく、馬鹿兄貴のせいで、あやうく可愛い甥っ子姪っ子と、兄上様を殺すハメになりそうだったわ」

デルタニア宮廷において、月梅を次代の王にと推す派閥があるのは承知していた。

白陽府の官僚は大体が月梅派、ついでに西方国境軍『地』と北方国境軍『山』も月梅派である。

白陽はデルタニア最大の地方府であり、二つの国境軍はデルタニア全軍の半分に当たる戦力を保持している、まさに軽視できない勢力である。

月季、英月を王へと推す声は無い、まず月季は王にはなれないし、英月は王になるつもりが無い。

自然派閥は三つである。

蒼弦王の息子、紅星派

紅星の妹、鈴泉派

先代紫貴王の娘、月梅派

である。

正統派はなんといっても紅星派である、英月の長女である正妃の息子であり、淡いが金色の瞳を持つ、まだ五歳だが、順当に王になるはず、の派閥である。

對抗馬は先も述べたように、地方派閥が推す月梅派、そして鈴泉派であった。

鈴泉の母親は前財務卿の娘で、宮家の血を引いていたためか、鈴泉も左目だけが金色の瞳の持ち主だった。

(デルタニアでは金銀妖眼は瑞兆として尊ばれる、これはデルタニア中興の祖である、黒銀王がそうだったからである。)

問題はこの母親が妙に権力志向が強く、方々に働きかけて娘を王にしようとしているのだ。

普通であれば最有力候補である王弟マクシミリアンを望む人間はいわけではない。

むしろ王家の人間(先の正妃など、そして当事者である紅星、鈴泉、月梅ら)や宮家の人間に多い、だがマクシミリアン自身が兄王への配慮か、性格によるものか、王位を願うような態度をとったことが無い。

それを察するように、宮廷で彼を無理に推す人間がいないのである。

(英月が恐れから推されないのに対し、ひどく対照的ではある。)

そして三つの派閥共通の認識は、マクシミリアンを味方につければ勝てる、である。

とまれ本人達の思惑を無視し(まあ往々にしてそういうものではあるが)、後継者争いは水面下で続いていた。

そして月梅の派閥は、北部のナバル。国境を接する国々で唯一友好国でないヒルトス共和国（カストリアの属国）とも国境を、ごく僅かな長さではあるが接している地方府のせいか、妙に荒っぽい連中が多いのである。

「月季様がいる状態で、そのような方法で玉座に着けるとも思えませんが」

「おお玉座についた瞬間、私の首が飛ぶわ、冗談ではないぞ」

「それでは王位継承者がいなくなりすが」

「伯母上ならばやる、いや殺る」

「・・・相変わらずのご様子のように」

現在は月梅が主の薔薇の宮だが、一時、月季が主であったことがある…いまから数十年は前だが。

月梅は、酒のせいもあってか、胡乱な目で眼前の庭師を睨んだ。

「（相変わらず年齢不詳だな、この男は…）ヒック」

かつての養育係である侍従長と乳母だった女官長はもう数十年はこの離宮に仕えているが、

その兩名が「あの庭師は私が若い頃からいます」と声をそろえて言っていた。

「（だいたいコイツ真名持ちだろう、王族でもないのに…）」

黒狼：ブラックウルフを意味する、真名文字のはずだった。

たしかに眼前の青年は黒髪に黒瞳、これはこれで大変珍しい相ではあるが、極東の島国ヤシマの民はほぼ全員がこの色彩を備えているらしい。

双貴の相の持ち主は、他人に真名を与えることが許されるが、それは厳重に管理され全て記録に残される。

調べる限り月季がこの男に真名を与えたいという記録は無い。

割と謎の人物である。

「ふう…よし愚痴を吐いてすっきりしたし、酒のおかげでいい気分だ、仕事にいくか」

「お出かけでございますか？」

「ああエルフリーデ神殿に面倒な駆け込みがあるらしい、私が出れば、どこぞのバカボンやバカ親が来ても撃退できるからな」

聖エルフリーデ、花嫁の守護聖人である彼女を祀る神殿は、望まぬ結婚など、虐げられた女性の保護に熱心だが。

この白陽のエルフリーデ神殿は、大陸一の駆け込み寺である。

元々自治権の強い教団の中でも、不可侵にかけては随一で、教皇やそれこそ斎の宮が出てきても突っぱねることがある。

「左様でございますが、お供はどなたが？コーンウォール卿は……」
「奴の名前を！」

月梅が叫んだ。

「二度と私の前で奴の名前を出すな！」

それは泣きそうな声だった

「二度と私の前で奴の名前を出すな！」

泣きそうな声で叫んだ月梅は、酒瓶を掴み、庭師が一番大切にし

ている薔薇の鉢植えに突きつける。

「この鉢ダメにしてやるからな！」

目が据わっている、どうやら本気のようにだったが、庭師はふわりと笑った。

「やれるものならどうぞ姫様。存じ上げないと少々意外でしたが……」

黒狼は笑いながら茶を飲む、少女の専売特許であるはずの不敵な笑みに、月梅の手が止まる。

「騙されんぞ！お前は、いつもいつもいつも、そうやって思わせぶりなことばかり言っつて、人を惑わす」

「人間き悪いことを」……そう言っつた黒狼は内心苦笑しつつ、月梅に囁く様に言っつた。

「その薔薇は世界にもう五種しか残っていない原種の薔薇、しかもこの離宮に五鉢きりです」

黒狼の言葉に、月季は毒気を抜かれたように酒瓶から手を離れた。「知らなかった……」

「教えませんでしたから」と楽しげに言っつ黒狼を、月梅は殺意の籠った眼差しで射抜く、

しかしこの年齢不肖の庭師はどこ吹く風、楽しげな様子で月梅の眼力を受け流す。

「コウシン、という種です。素朴で可憐な花で、大輪の薔薇ではありませんが、でも野生種らしい力強さを持った、不思議な薔薇でしょう？姫様にお似合いですよ。」

「くっ……」
この大陸で薔薇が似合いと言われて嬉しくない女はいない、月梅は嬉しい、

が……微妙に貶されている様な気がする。

五枚しかない花卉、色は可憐な赤、野薔薇系の薔薇は、到底自分に似合いの薔薇だとは思えない。

自分で言っつのもなんだが、自分は豪華な美少女だという自覚があ

る、こんな素朴で可憐な美少女だったら奴も…と思う。

そんなことを考えた自分自身に怒りが湧き上がった。

そこに畳み掛けるようにわざとらしく黒狼が「いまさら何を失っても惜しくはありませんが、この薔薇は惜しいですねえ」などと嘯く。

「くそつ、貴様はいつもいつもそうやって」

酒瓶を庭師に全力投げつけるが、なんでもないように青年はそれを受け止め、テーブルの上に置いた。

「ああつもう！せつかく良い気分だったのに、貴様のせいで台無しだ！」

どうしてくれるんだ！と少女が怒鳴る。

「そうですね、お時間があるでしたら、もう少し愚痴を聞きますが？」

「ほおいいだろう、覚悟しろ！」

月梅は小屋を飛び出すと、すぐに戻ってきた。

テーブルからカップや菓子皿をどかし、ドンと持ってきた一枚の地図を広げる。

デルタニアの地図である。

「北方のバーバリアンはともかくとして、ヒルトスはがやつかいなのだ。首都の方はもうごたごたで動きが取れんらしくてな。叔父上と兄上は私にこの件私にまかせてくれるそうだ」

「はあ左様でございますか」

最大の敵国カストリアは同盟国を間に挟んでいるが、ヒルトス共和国とは北西部の国境を接している。

厄介なことにヒルトスはカストリアの属国で、デルタニアに敵対的な国家なのである。

カストリアがきな臭くなってから、ヒルトスはたびたび斥候部隊を国境近くに送り込んでいる、戦“だけ”は上手かった蒼弦がいなくなり、遠からずヒルトスは本腰を入れてデルタニアに攻めてくる可能性がある。

ヒルトスとはデイトニアも国境を接しているが、デイトニアは対カストリアの要であり、ヒルトス程度はデルタニアだけで退けねば、宗主国としての立場が無い。

（もつとも軍事力ではデルタニアがぶつちぎりどべなので、いまさらといえはいまさらだが）

「北は北方国境軍『山』の連中に任せることにした」

「賢明な判断かと思われ、夏とはいえ北方辺境域では他の軍は役に立たないでしょう」

「特に今駐留している近衛は役にたたん、ただでさえバカ兄貴について四人も将軍がいなくなつてガタガタの状態だ」

「いやはや」

近衛軍は、ここ五十年程の戦乱で鍛えられ、デルタニア最強クラスの軍隊に成長していた。

がしかし左右前後の四名もの近衛将軍を欠き、現在は統制がほとんど取れない状態にある。

現在は白陽で後詰に残っていた近衛全将軍の指揮の下、肅々と撤退中である。

「『地』『雷』だけでは万が一カストリアが侵攻してきた場合、どうにも支えきれん、『水』は水軍だし『月』は特殊部隊『風』は伝令が任務だ」

デルタニアは八つの常備軍を持ち、『山』は北方国境軍、『地』は西方国境軍、共に防衛戦を得意とする軍であり最大の規模を誇る、『雷』は臨機応変に戦場に投入される最精鋭の常備軍で、その行軍速度は随一を誇る、しかし軍団の規模はかなり小規模なのが弱点だった、これ以上規模が増えると軍団の質が落ちるという理由で、増員は現場の将軍達に拒まれ続けている。

「『火』は防衛戦には向いていませんし、いつそ解散したらいかがです？もう三百年もまともに運用していない軍団なんて税金の無駄

使いですよ」

「そもいかん、奪われた土地を取り返す時には役に立つからな」
「さようでございますか、まあ近衛が動けないと微妙に辛いのがデルタニアのダメなところで…逆に言えば、常に皇王陛下が近衛を連れて戦陣に在ると言うのが、デルタニアの強みですがね」

近衛は、首都周辺の防衛軍、首都内警護軍と共に王直属の『天』に属する。

あとは極少人数ではあるが、辺境に生息する幻獣「竜」を駆る竜騎士団があるが。

彼らはあまりに人数が少ないため、軍団としては数えられていない。

(もつとも実際に戦闘になれば、彼らは軍団に匹敵するのだが、それは別の話である)

「となると頼めるのは一つしかない」

「僧兵団ですか？教団はお飾りとはいえ「狛下」がいなくなったので、上に下への大騒ぎでしょう？」

「何、それほど面倒なことではないさ、月季伯母上様にご出馬願えばよい、すでに叔父上に説得をお願いしている」

「殿下は『触らぬなんとやらに祟りなし』という諺をご存知ですか？

宰相の宮様もおかわいそうに」

なにやら手巾で目頭を拭う黒狼、わざとらしい演技である。

「ああ何やら叔父上は死にそうな顔をしていたぞ」

無理も無い、と黒狼は思う。

月季は現在の皇族では唯一、真正の黄金の髪と瞳を持ち、常に皇位継承権一位にありながら、三度玉座を蹴った女傑。

(先に述べたように、蹴らざるを得ない、という話もあるが)

大陸において広く信仰される「龍」信仰の教団において別格たる、「斎の宮」「竜眼の巫女」であり、皇王が(伝統的に)兼任する教団の(お飾りの)最高位「法皇」よりも実権が有る(具体的には法

皇及び教団の実際の運営を行う枢機卿の罷免権が有る。

月季は宗教儀式以外では教団の運営には一切口を挟まないため、教団の枢機卿や司教達からも（色々な意味で）絶大な信頼を得ている。

（もちろん、真面目な僧侶達からは本来の意味で敬われているが…）

「あの方がまだ紅顔の美少年であった頃、あの方は月季様に求婚されたことありますからねえ」

昔を懐かしむように言う黒狼に月梅の目が輝く。

「なんだその愉快エピソードは詳しく聞かせろ、話さないと貴様に鼻にブランドーを流し込むぞ」

ふたたび酒瓶をむんずと掴む、またまた目が本気である。

しかしはぐらかすように黒狼は笑うだけだ。

「くう…しかしさすがは伯母上、王族最恐と畏られているだけのことはあるな」

「まあ竜眼の巫女たる齋の宮様ですからね、皇王陛下だってその気になればスポンと首を飛ばせますからね、あれ比喩ではないですよ？実際そうやって死んだ王も居ないわけではありませんからね」

「我らが祖父の長兄だったというアレか」

「そうですね、まれにみるバカ皇王でしたからねえ…」

遊女に入れあげただけならともかく、それを後宮に入れて妃に。

その遊女が実は共和派のスパイで、共和思想に被れて罷免。

ありつた金の金と機密を持ち出して共和国に亡命しようとした」

「すぐに全土に手配書が出されて、御前に突き出されたのが三日後だったというのは事実か？」

「はは、それは嘘ですよ、突き出されたのは…三時間後です」

龍の声を聞く、とされる、齋の宮は地上における神意の代行者である。

全土の信者達にすでに国を売ろうとした王の居場所を突き止めさせていたのだ。

当時月季はまだ四歳にもなっていなかったはずである。

「あげく斬首刑か…」

「まああの陛下はここ百年では一番出来の悪い王さまでしたからねー、父親から悪い所ばかり貰った感じで…ああ、お兄様も気をつけませんと同じ眼にいますよ？」

ちなみに、王位を継いだのは次兄鳳千、彼は在位の全てを共和国との戦争に費やし、三人いた息子共々、戦死してしまった。

その後王位を継いだのが月季の父、月梅の祖父である火月王である。

月梅と同じ病をもつ身でありながら、兄王在位時より兄王を補佐し、兄の戦死後は即座に王座に着き、混乱を最小限に収めた。

ここ百年では最高の王と呼ばれたが、無理がたたり息子の成人と同時に退位。

現在は白陽離宮の牡丹の宮で静養しているが、床から離れることは出来ぬ体となっている。

マクシミリアンは毎月のように、紅星や鈴泉を連れて祖父を見舞い、甥姪に英才教育を施している。

(月梅言わせれば少々早すぎる気がする)

「バカ兄貴など死んでしまえばよいのだ、父もだが、なぜにあのお祖父さまからあんなのが生まれるのだ？」

割と好き放題な月季も含め、火月の血統はあまりに出来が悪い。

例外は祖父に良く似た性格のマクシミリアンだろうか？

「姫様が玉座にお就きになれば良いのでは？その金の髪にはそれだけの価値がございますよ？」

月梅は黒狼の発言を完璧に無視すると、だまってブランデーを半分はいれた紅茶を啜る。

「まあお行儀の悪い、女官長が見たら悲鳴をあげますよ」

「普段はお行儀よくしている」

「で？僧兵団を出せたとしても、時間がかかりますよ？指揮系だってバラバラですし」

「いいのだ、別段実際ドンパチをやらかすつもりは無いんだ、ナバ

ルのバーバリアンは仕方ないが、共和国にはまっとうな駆け引きが通じる、つまり遠征軍である連中の軍団を圧倒的に上回る戦力を備えて、攻めたらお前らが負けるぞ、とわからせてやればいい、ならば僧兵団が後ろで控えているだけで奴らを威圧できる、しかも兵糧も金も教団がだすからな」

「おやおや」

「私も戦場に出るつもりだ。そうならば一部だが『天』の連中…近衛で使える連中を総動員できる。」

指揮系統はガタガタだが、幸い近衛全將軍のオースティン卿は馬鹿兄貴についていかなかったからな」

近衛全將軍は近衛の最高位。オースティン卿は火月王の代にその任についた歴戦の將軍である。

「姫さまが戦場にでるということは『月』の嬢子軍を使うのですか？」

「そうだ、戦闘はともかく後方支援には役に立つだろう、なによりも男どもを奮起させるのに役に立つんだあの娘達はな」

女性だけで構成される嬢子軍は主に後方支援、輸送部隊の護衛や衛生兵としての任務につくのだが、

もっぱら女性の王族の護衛部隊として運用されることが多い。

月梅の言うように、後方にいるだけで他軍の男達を奮起させる存在でもある。

単に格好付けたいだけの連中もいれば、自分たちが引けば後方に女達しかいないという悲壮な覚悟を抱かせる存在でもある。

デルタニアの軍略は基本的に防戦であり、こちらから侵略することとはまず無い、それは専門とする軍団『火』の任務である、

がしかし土地が欲しければ未開地である東部辺境域を開拓すればいいだけのことであり、デルタニアが最後に攻勢をかけたのは300年程前

それも侵略され奪われた土地を奪還する時以来無いことである。

「ほぼ完璧ですが、問題が幾つか、まず第一に姫様は戦場などという

不浄なところにはお出になられる体ではございませんよ?」

祖父、火月と月梅が患う病は、皇王家特有の異能に由来するものである。

鋭敏すぎる霊的感覚を持って生まれたものの、それを退けるだけの力を持たない王族が患う病・・・一種の呪いである。

火月も月梅も髪はまさに黄金と呼ぶに相応しい色を持ったが、瞳は共に水色。

破魔の瞳、とされる竜眼を持たため、不浄な氣に中てられ、体調崩してしまうのである。

白陽離宮はそういつた王族が静養するために、特別に清められており、薔薇の宮内ならば元氣な月梅も、離宮内では体調は万全とは行かず、白陽内でも神殿内など清めれていない所では病弱な病人程度までに体調は落ち込んでしまう。

権謀術数渦巻く(少々大げさな氣もするが)黒珠や、血や死といった穢れの多い戦場になど出れるはずもない。

「一個小隊ぐらい坊さんがいれば、なんとかなる範囲だ。お祖父様もそうしていらした」

「そのご無理の結果を姫様はよくご存知かと思いましたが、次に姫様の護衛はどうするのです?万が一の際に嬢子軍では」

「そうだな護衛は欲しいな。それこそいざとなったら万の軍勢を蹴散らして私を守ってくれる護衛がな」

「万とは大げさな、精々千ぐらいにしておかないと、姫様は少々理想が高すぎるのでは?そんなことですからコーンウォール卿に逃げられるのですよ」

「あのホの話はするなと言ったぞ!」

「ばんつと月梅がテーブルを叩き黒狼を睨む。

「モって仮にもあなたの婚約者でしょう。しかも相手はあなたの兄上ですか」

「そつだ私は奴のせいで、一生言われるんだ兄貴に婚約者を寝取られた「女」とな!」

バンバンとテーブルを壊しかねない勢いで叩く月梅の、表情は悲壮な怒りに満ち、おそらく視線で人を殺せるならば、いまの月梅は万の軍勢を退けられそうだった。

「寝取られたつて…コーンウォール卿は十分に貴方を愛されたましたよ…多分ですが」

「黙れ！それ以上奴の話の話を続けたら承知せんぞ！」

おやおやといって再び茶を啜る黒狼だが、実際のところコーンウォール卿…

侍従長の孫であり右近衛後將軍であつた月梅の婚約者。

ジェラルド・コーンウォールは月梅を愛していた。

その証拠に黒狼を見るジェラルドの眼はけつして友好的なものではなかつた。

禁園である離宮の庭園へ押し入るような男ではなかつたが、下手すれば切り殺されていたことだろう。

無理も無い、自分にはつれない（原因の何割かはジェラルド自身にもあるのだが）婚約者が「師匠」と慕い、王であつても主の許可無く立ち入れない禁園に住んでいる庭師の男なのだ、勘ぐられてもしかたがない。

だがしかし彼は「男」である前に「騎士」だつたようで、王への忠誠心と信奉が愛に勝つたのだろう。

おおよそ王としては失格だつたが、先王の雄としてのカリスマは並ではなかつた、そればかりは否定のしようがない。

月梅とてジェラルドを好いていたのだ、しかしジェラルドの心は主たる王に向けられていた、ようするに二人とも少々不器用すぎたのだろう。

いまさらだが、可哀相な二人である。

黒狼にできるのは、下手な慰めではなく、月梅を泣かせてやること…のつもりだつたが、失敗したようである。

内心では後悔しつつ、この事に関して、マクシミリアン辺りに任せるしかないと考えていたりした。

「む、もう時間か…仕方ない、再び私を不愉快にした罪は後で贖って貰うぞ黒狼。」

とりあえず黒い薔薇の咲かせ方をきっちり教える、今度こそな!」
そう言い捨てて、月梅は離宮へと向かう、さすがに庭師モドキ姿で行く場所ではない。

「いやはや…護衛、護衛ねえ」

可愛らしい主の安全のために、使えそうなツテを思い浮かべる黒狼だった。

第五章

「さも当たり前のような顔で着いてくるのね、黒狼」

「エルドネスト商店が、新しい肥料を仕入れたと言っているので、姫様も帰りに寄りませんか？」

「寄るわ」

「姫様」

即答した月梅を、同乗する女官が窘める。月梅本人も無理だと知っている、だが想像するくらい自由である。

王家の姫が乗っているとは到底見えぬ質素な馬車、御者は庭師の青年である。

エルフリーデ神殿は離宮から、そう遠くはないが、月梅の体はその距離を歩くことすら適わない体だった。

御者の軽口に、搾り出すように憎まれ口を叩くが、御者が気心の知れた青年でなくば、じつと我慢するしかない。

既に目眩と頭痛で目を開けているのも辛く、正装の腰帯も女官長がごくゆるく締めてくれたはずなのに、吐き気が止まらない。

神殿多く、朝夕の聖句で、比較的清められている白陽でさえこの有様。

ままならないこの身が、月梅にはひどく煩わしかった。

ふいに、体が楽になった。

「エルフリーデ神殿のお隣、ウルズラ神殿です。ここで一休みして、あとは神殿経由で参りましょう」

女性の教育を守護する聖人ウルズラの神殿は、伝統的にエルフリーデ神殿と仲が良く、隣接しており、間に通用口のようなものがある。

「姫様、薬湯をお作りしますか？」

月梅付きの筆頭女官であるシモーネが、額の汗をぬぐいながら、そう尋ねてくる。

「薬臭い匂いをさせて、エルフリーデ神殿にはいけないわ」
「ですが姫様」

乳姉妹であるシモーネは月梅とは、生まれた時からの付き合いである、月梅の言がただの強がり…というかプライドの問題なのだと解っている。

しかし頭では解っていても、心までは納得しないものである。

「姫様、こんなこともあるつかと、香草茶を持ってきました、どうぞ」

「黒狼、あなたはまた勝手な！」

「…貰うわ」

「姫様！」

匂いもほとんど無く、味もほとんどしない、少し甘味のある、まるで砂糖水のような香草茶だった、若干だが薄荷の香がした。

月梅に付いて外出するときは、大抵これを持って来る黒狼だが、これをシモーネは快く思っていない。

そもそもシモーネは月梅を病弱な妹だと思い込んでおり（まあ実際その通りなのだ）離宮での庭弄りを良く思っていない。

離宮の内部特に薔薇の宮内ならば、月梅は元気すぎる程元気なのだ…

さらにシモーネは黒狼ことを毛嫌している。

これは月梅の推察するところでは、シモーネなりの対抗意識…と

言うか一種の嫉妬のようなものなのだが、表向きは一国の姫が、下々の者に必要以上に親しくするべきではない、と理論武装し、月梅を諭し、黒狼を攻撃している。

まあ月梅にしてみれば、少々やかましい姉といったところである。（ちなみにシモーネの母であり、月梅の乳母であった女官長ヴァンダは、普通に過保護な乳母だった）

「すまんな黒狼、大分楽になった」

「それは何よりでございます」

「いい加減作り方を教えてくれんか、お前が付いてこん時は、シモーネに無理矢理、薬湯を飲まされるんだぞ」

「姫様：わたしはシモーネ様に殺されたくはありません」

そのセリフが余計シモーネを逆上させるのだが、黒狼は何処吹く風である。

「まあ月梅様」

「ああ、シスター・ゾフィーネ。すまないが少し休ませてくれぬか」

横にドンッと貫禄の有る女性がすっ飛んでくる、ウルズラ神殿の筆頭シスター、ゾフィーネだった。

「お隣に用がございませうでしょうか？こちらに寄られると思って、床を用意してございますわ」

「はは、すまん、後で薔薇の香油でも届けさせよう」

「さあさ、そんなお気は回さずに、こちらへ」

「兄上…なぜこんな所にいらっしやるのです？」

ウルズラ神殿で休憩を取り、大分まし、になった月梅は急いでエルフリーデ神殿へと向かった。

ウルズラ神殿の下にも置かぬ歓待に、ついウトウトしてしまい（誰も起こさなかつた！）既に約束の刻限はとうに過ぎ、日が落ちかけている。

妙に夕日が綺麗な夕方だった。

駆 け込んだエルフリーデ神殿で彼女を出迎えたのは、身内、身内、身内。

つまり

次兄アクシミアン

叔父英月の妻、叔母アンリエッタ

母方の祖母、アデライード

そして従姉妹であるアンゼリカ

「月梅：市内に出て体は大丈夫なのか？顔色が良くない」

「質問にお答えないさませ！兄上」

苛立ちと怒りを込めた瞳でマクシミリアンを射抜く。

「なぜエルフリーデ神殿に兄上とアンゼリカが一緒におられるのです？」

「げ、月梅様」

「マクシミリアン兄上にお聞きしているのです、貴女は黙っていないさし」

口を開きかけたアンゼリカを、月梅は冷たい声音で黙らせた。

マクシミリアンらには内緒で月梅を呼んだ、エルフリーデ神殿の司祭はおろおろするばかりである。

「月梅：僕は」

そこまで言ってマクシミリアンが黙り込んだ。

先ほどまで月梅に向けられていた視線が、その背後を見ている。

振り返った月梅、そこには叔父英月と伯母月季が立っていた。

月梅は悟ってしまった。

マクシミリアンとアンゼリカが恋仲であること。

王位がマクシミリアンを継ぐにあたり、王妃候補として、何名かの真名持ちの姫の名が上がっていること。

その中にはアンゼリカの名は無いことを

そして、後に立つ英月の表情と、月季の存在。

カチリとピースが嵌る。

「黒狼、いるのでしょうか、出てきなさい」

「御意に姫様」

「次の王は誰？」

「紅星様と相成りました、神勅でございます」

エルフリード神殿の中庭にいた竜騎士を見た時に感じた嫌な予感、ウルズラ神殿で休む間。黒狼に情報を探らせたのだ。

「…られない」

小さな声で月梅が呟いた。

「月梅？」

「信じられない！見損ないましたわ兄上！…いいえ王弟マクシミリアン・デルタニア！」

少女の怒気に、場が震えた。

平気な様子であったのは、王族である月季、マクシミリアン、英月…そして黒狼だけだった。

「あなたはいったい何を考えているのです？この危急の時に、好きな娘と結婚できないから王にはならない、そういうことですか？」

マクシミリアンには返す言葉もない。

月梅の金色の髪が燐光を放ち、ざわりざわりと動き出す。

それを見て、月季が「ほお」と感心した様子で笑う。

ほとんど気を失いかけていたシモーネが、それに気が付き、慌てて月梅に駆け寄ろうとした、がしかし黒狼がそれを遮った。

「シモーネ様、危のうございます」

「放しなさい黒狼！姫様、姫様、お気をお静めください！」

忠実な女官の悲痛な叫びが、神殿内にこだまするが、肝心の月梅には聞こえてない。

「すまない月梅、僕も情けないとは思いますが…こればかりは曲げられない」

「なんとでもお言いなさいませ、本当に愛とやらがあるのならば、正妃だの愛妾だの、そんなものはただの記号ですわ。」

男なら二人とも愛してみせなさいませ。私はそう申し上げたはずですわ…結構、お好きになさいませ」

愛想を尽かす、とはまさにこのことだろうか？白けた表情で兄達を見下ろすと、くると振り返り、マクシミリアンに向けた怒りの、数倍の怒気を眼前の二人に向けた。

「そもそもは、宰相、白宮の英月！あなたが王位を継がぬからでしょう、何が気に食わないのか知りませんが、二度も玉座を蹴って、何様のつもりですか？

前から一度言ってやろうと思っていましたわ…あなたが馬鹿親父の代わりに王位についていれば、デルタニアはもうちょっとマシでしたわよ！」

「そんなものは結果論だろう」

「少なくとも、私は生まれていませんでしょうね！あなたの大事なお姉さまは馬鹿親父に嫁ぐことはなかったでしょうから」

自らの母親を罵倒する少女の言葉は、まるで血を吐くような痛みで満ちていた。

生憎少女の表情は相対する、英月と月季にしか見えない。

マクシミリアンは月梅に声をかけようとした、がしかし、黒狼に

抑えていたシモーネがついに黒狼を振りほどくと、マクシミリアンと月梅の間に割っていった、まるで月梅を護るかのように月梅を抱きしめると「お静まり下さい」と繰り返す。

だが月梅はシモーネを気にすることもなく、怒気を放ち付ける。さらに半狂乱でわめくシモーネ、その鬼気迫る表情に、マクシミリアンは二の句が継げなかった。

「齋宮、月季！神勅だかであつち上げだかはどうでもいいですけど、あなたは精々王が馬鹿をやった時に首にしていればいいのですわ！何をしゃしゃりでてきて、勝手に私の可愛い甥っ子に王位を押し付けているのです？」

齋の宮を齋宮と呼ぶのは非常に礼を失した行為である。

エルフリーデ神殿の司祭が悲鳴をあげる。

もっとも当の月季は、気にすることもなく、ふてぶてしい様子で月梅に応える。

「なんとも言え、月梅。神勅は神勅だ…そろそろ気を静めんと、お前命に関わるぞ」

「おとといきやがれ、ですわ！」

「月梅！」

マクシミリアンが悲痛な声を上げる、月季への不敬を、神殿関係者の前で行うのはまずすぎる。

「あなたにとやかく言う、権利はございませんわ、マクシミリアン・デルタニア。王の何たるかを理解せぬ輩に王たる資格はございませんわ。そういう意味では、宰相も、齋宮も、あなたも、王たる器ではございませんでしたのね、本当に・・・本当に残念でしたわ・・・黒狼」

「なんでしょうか姫様」

「すぐにダニエルとアデナウアー、それとコンラートとディートリヒに連絡なさい」

「御意に」

躊躇なく黒髪の庭師は答えた・・・

「すぐにダニエルとアデナウアー、それとコンラートとディートリヒに連絡なさい」

「御意に」

マクシミリアンと英月が表情を一変させた、マクシミリアンは蒼白とわかっていいほど、一瞬で血の気が引いた。

「月梅！」

「そんなに皆、王になるのが嫌ならば、私が王になりますわ…これ以上馬鹿兄貴がなにかしでかすならば、と思っていましたか…まさかこんなことになるなんて、思いもありませんでしたわ、マクシミリアンお兄様」

英月は、淡々と怒りの気を際限なく放つ姪から目を逸らし、踵を返そうとした、しかし果たせなかった、そこには槍を持った一人の男、マクシミリオン達を白陽に運んだ竜騎士が立っていたのだ。

「いやー宰相閣下、申し訳ないんですが、相棒を人質…いや竜質にとられましたか？大人しくしていただけますか？あ、巫女様も。とこるであの黒い何者です？」

「アレは薔薇の宮の庭師だ、参ったな…月梅とアレがここにいるとは想定外だった」

その言葉に月梅が、してやったり、といわんばかりに、薄く微笑

んだ。

凄絶な笑みだった。

「正気か月梅：そなた王位を篡奪するつもりか？」

英月の言葉に、事情を理解していなかった面々の表情が驚愕に凍り付く。

例外は半狂乱のシモーネくらいだろう。

「篡奪などはいたしませんわ白宮の英月。

玉座は空位、王冠は先日、この白陽の大神殿に戻ってきたばかりですもの。宮廷の連中に、私が王になる、といえば、皆喜んで賛成してくれませうわ」

「おい英月、無駄話をしてる場合ではないぞ、そろそろ月梅の体が持たないぞ」

マクシミリアンが月季の言葉に反応して動こうとするが、シモーネはそれを許しそうにない。

英月は竜騎士の槍が背に突付いている状態だ。

「貴女がなんとかなさればよいでしょう！」

「駄目だ、私がやると月梅は死ぬぞ」

「死ぬ」という月季の言葉にシモーネが反応する。

マクシミリアンがその隙を見逃さず、月梅に飛び掛ろうとして、果たせなかった。

「月梅、気を静めなさい、体に毒だ」

黒狼が押す一台の車椅子、それに乗った一人の老人が、優しく月

梅に声をかけた。

「お祖父様…なぜここに」

「なにやらお祝い事があると、エルフリーデ神殿から使いが来てね」

月梅の祖父、火月は苦笑いをしながら、言葉を続けた。

「久々に無茶をやらかして、ここまで来たのだが、すっかり参ってしまった。ずっと床で休ませてもらっていたのだが…ひどい怒気で目が覚めたよ」

「そして車椅子を用意した、お前の庭師が迎えに来たのさ。」

それを聞き、ぐらりと月梅の体が揺れ、慌てて月梅の祖父火月は、可愛い孫を抱きとめた。

「詳しい事情はここに来る間、お前の庭師に聞いたよ。」

まったく、我が娘、我が孫ながら、困ったものだ」

優しい手付きで、背中をさすってくれる祖父に、月梅の瞳に涙が滲む。

そのまま祖父の胸に顔をうずめると、嗚咽を漏らし始める。

「自分勝手なのは、デルタニアの王族の専売特許だが…」

他人を傷付けて良い理由にはならない、お前がこの数日、婚約者を失った痛手を隠して、この国の未来を憂いてあれこれと動いていたというのに…」

あんな馬鹿のことなど痛くも痒くもありません、と嗚咽交じりに、月梅は言ったが、おおよそ説得力の無い言葉だった。

「マクシミリアン」
「…」

マクシミリアンは返事をしなかった、しかし一步譲らぬ瞳で祖父を見詰め返す。

火月はそれ以上、何も言わず。自らの娘に顔を向ける。

さしもの斎の宮も父親だけは、苦手なのか、月季はまるで少女のように、ふてくされた態度でそっぽを向いた。

「月季」

「なんですか？父上、お説教は結構ですよ」

「そなたの軽率な行動で、年端もいかぬこの娘がどれほど傷ついた、わかるか？

わからぬかも知れぬな、そなたは強い、だから弱きものの心がわからぬ。

だが、それで斎の宮などと」

「お説教は沢山です、父上」

嘆息した火月は、諦めたように首を軽く振り。

最後に宰相、英月に声をかけた。

「英月」

「王はマクシリアンです、これは宮廷会議の決定事項。

反対意見は私がかんとかしましょう…幸い滅多に宮廷に顔を出さぬ、不良巫女の言などなんとでもできます」

最初からそのつもりです、と言う英月を月季が睨むが、努めて英月は無視することにした。

「…宮内卿には少々泣いていただきますが」

「お父様…」

アンゼリカが泣きそうな声に、英月は忌々しげに顔を歪めたが。母親と妻の視線が痛い、もはやそれ所ではないのだ。

宮廷と軍に、月梅の手が恐ろしいまでに入り込んでいる。

わあわあと歳相応に祖父の胸で泣きじゃくる少女が、英月にはまさしく理解できない生き物に見えた。

「王に、エルフリーデ神殿に駆け込まれては、たまりませんので」

「私は既に引退した身、口を挟むつもりは無い。だがなこれだけは言っておく、共和国は厄介だぞ」

「肝に命じます」

そう言つと、英月は首都へ戻るべく、自分の背に槍を突きつけていた竜騎士を促し、その場を去つた。

「場をうまくまとめたつもりですか？父上…わたしは冗談やでつちあげで神勅など下しませんよ？」

「紅星はあまりに幼すぎる、災いが有ると言つなら、そなたは巫女の責務を果たすことだ」

「やれやれ…面倒になるな」

捨て台詞を残して月季は踵を返した。

身の置き場のなかつた白宮家の女達を、マクシミリアンが促しその場を退出する。

シモーネが泣きじゃくる月梅を抱き上げ、司祭に医師を呼ぶように命ずる、月梅の顔からは血の気が完全に失せており、人目で体調が悪化しているのが見て取れた。

慌しくその場を去る一行：

部屋には火月と黒狼だけが残されたのだった。

「黒狼」

「はっ」

「もし私がエルフリーデ神殿にいなかったら、どうするつもりであった？」

「姫様のご命令の通りにいたしました」

「そうか…年甲斐も無く無理をした甲斐があったようだな」

「まことに僥倖でございました」

月梅が連絡を命じた四人。

ダニエル…ダニエル・ドリストロンは、白陽府の官僚のまとめ役である。

アデナウアー…アデナウアー・ローゼンカヴァリエは軍務卿。

コンラート・フィッツガルドはデルタニア八軍の一つ、伝令部隊『風』の軍団長。

ディートリヒ・ペーターセンは特殊部隊『月』の軍団長である。

全員、月梅が命じれば、諾と言う。

宮廷会議と官僚を押さえ。

『風』の伝令が『地』『山』『雷』『水』『火』へと走る。

そして『月』が後宮から紅星と鈴泉をかつさらい、白陽府へ到着すれば…月梅は近衛以外のデルタニア八軍を掌握し、宮廷の承認を得て合法的に王になっていただろう。

果たして、それが月梅にとって幸せあったか？

十四歳の孫娘に重責を負わせていることに、火月の胸は重くなっ

ままならぬ身体でなければ、孫達にこのような面倒をかけることなどなかっただけに…

「さて明日から忙しくなります。結局のところ、ヒルトスへの対応は姫様のお仕事のままでしょうし」

「優しい子だ、護ってやってくれ」

「御意のままに」

すっかり日は暮れ、天空には冴え冴えとした月が浮かんでいた。

鈴泉の章〜断章〜

「龍」、混沌より生まれし創世の神、全ての父神であり母神

五界「エプシイの神話

神聖デルタニア皇国、首都黒珠、デルタニア王宮、白の宮
先王の王子。紅星ら直系の王族が生活する宮である。

宰相英月の継承権放棄に伴い、現在皇王位第二位（実質一位）を保
持する。先王の一子、紅星は勉強部屋にいた。

デルタニア暦で五歳、我々に馴染みの太陽暦では約四歳の少年で
ある。

真性とまではいかないが、金に黒を溶かしたような珍しい瞳を持
つ、いわゆる「真名」持ちの皇族である。

教師の講義を真面目な顔で真剣に聞き、時折羊皮紙に書き写す様
子は、いかにも可愛らしい。

ここ数代続く、問題皇族の連続のせいだろうか、周囲の期待を一
身に背負ってしまった、宮中「期待の星」である。

そのせいか、地歴を教えている教師の講義も五歳児向けのもの
とは思えぬ、熱の入りようである。

そんな二人を傍目に、部屋の隅っこで、ふて腐れた様子で、ひとり人形遊びに興じる少女が一人。

第三位継承者、先王の王女、鈴泉である。

光に当たれば、ほとんど金髪にも見える、ブラウンの髪は所謂ツインサイドアップに結われ、彼女が動き度にぴよこぴよことゆれる。双貴よりも珍しいという、左右で瞳の色が異なる金銀妖眼の相、右に金、左に銀の瞳を持つ少女である。

三月前の起きた父王の出奔劇に始まる、今回の騒動で、野心家の母親から隔離され、白の宮で紅星と共に寝起きしている。

しかし、この二人、とても仲が悪い。

無論子供のケンカレベルなのだが、原因は簡単である。

紅星と鈴泉は誕生日が五日しか違わないのだが、年末生まれの紅星と、年明け生まれの鈴泉は曆上、紅星が年上なのだ。

ところが、何かというと紅星が「お兄ちゃんぶる」のが鈴泉の癪に触るのだ。

さらには母親のせいで、誰もが鈴泉には腫れ物に触るような態度で接するため、

多感なこの少女は大抵ぴりぴりしている、それをまた紅星が大人ぶって諭す。

普通、子供というのは女の子の方が、大人びていることが多いが、紅星は「次の王は自分だ」という強烈な使命感に燃え、ひどく大人びた少年であり、逆に鈴泉は境遇のせい、やや甘えん坊である。

結果、三日に一回は取っ組み合いの大喧嘩に発展する。

双方共に異能の証たる竜眼の持ち主、全身に大量の雷気を帯びた取っ組み合いは、もう唯人には止められない。

二人の疲労が限界に達してぶっ倒れるか。

(先に倒れた方の負けであるが、諸々の事情により、紅星の黒星が多い)

この段階に至る前に、叔父マクシミリアンが仲裁に入るしかないのである。

現在宮廷には二人の同年代の子供がほとんどおらず、二人を構ってくれる大人もほとんどいない。

高い身分の子供に生まれた宿命、とってしまえばそれまでだが、それを幼い子供達に納得しろというのは酷な話である。

しかも頻繁に二人を構ってくれた、叔父マクシミリアンは先日正式に王に即位し、多忙すぎる日々を送っている。

もうひとりのケンカの仲裁役にして、二人にとっては姉のような叔母月梅は、生来の病ゆえに副都白陽から離れられない。

(もつとも月梅は嬉々として喧嘩に参加して、二人をノックダウンさせるのだから、仲裁というには少々語弊があるかもしれん)

鈴泉の宮ならば、お付の女官や、歳の近い子供の女官見習いが相手してくれるが、紅星の宮では、前述のように皆、鈴泉の相手をしてくれるものはいない。

心細いのだろう、仕方なく鈴泉は紅星にくっついて離れないのである。

紅星もいつもと様子の違う妹を気遣い、紅星付き筆頭女官に配下の者達の、鈴泉への対応を改めるように命ずると、ここ二ヶ月ほとんどケンカもせずにいる。

(そのことをマクシミリアンにほめられ、得意になり、軽くケンカにはなつたのだが…)

今日も鈴泉は、面白くも無い講義を受ける紅星について勉強部屋に入り浸り、マクシミリアンが贈ってくれた、今ひとつ…いやみつつはセンスに問題の有る、可愛くないウサギやらイヌやらネコのぬいぐるみで一人遊びをしている。

教師もすでに慣れてしまったのか、鈴泉のことは気にせず、講義

を続けている。

「さて殿下、このデルタニアの国教であり、アルステーデ大陸で広く信仰される「龍」は何も無い混沌より、五番目に生まれた創世の神とされています。

もつとも、最初から四番目までの神の名は伝わっておりません、神学者達には格好の議論の種となっていますが…これは失礼話がそれでしたな。

さて龍が最初に造ったとされます、アルステーデ大陸は東西に長い、東側が比較的大きく、西側が小さい、ちょうど横にした、くびれの無い瓢箪のような形状をしています。」

教師は大陸の地図を広げながら、講義を続ける。

かなり正確な形状をした地図である。

双貴帝の腹心であり、軍師であり、「黒衣の宰相」と呼ばれた人物が一筆書きで書いたという地図が原型である。

後に龍神教団が、一応それなりのレベルまで発達した測量技術で補正した地図であるが、ほとんど修正点が無かったことに、当時の学者達は、頭を抱えたという。

この軍師というのが、謎の人物なので、仕方ないことである。

ちなみに大陸の総面積は約一萬七千平方キロメートル。

ロシア共和国の総面積とほぼ同じといえば解りやすいだろうか？

「大陸の西部は、アルビオン王国、ヘスパトリア連合、神楽連邦の三強国が属国を引き連れ、年中戦争をしております、民には大変迷惑なお話でございますな。

元々は同じ国だっただけに、根が深く、たびたび教団が仲裁をしておりますが、いかんせん本部から離れすぎておりますので、教団も後手にまわりがちでございます。

さて大陸の東部はほぼ全域は、我が神聖デルタニア皇国の領土と
なっているが、その大部分は未開拓の「辺境」でございます。

極東の島国ヤシマと、ヤシマの対岸沿いに小国家が幾つかござい
ますが、こちらとは交流も殆ど有りませんので、神秘の国々、など
と呼ばれております。

大陸の中央部、中原地方は豊かな分国も多いです。

北部の海岸部と群島は、蛮族達の連合国家ナバルが事実上支配下に。

中央部には周辺の国々を併呑し、狂国と呼ばれ恐れられますカス
トリア共和国が。

西部は都市国家群が、大国に対抗するべく都市国家同盟を形成して
います。

肥沃な南部と南海の大島（実に三千方キロメートル）シイナを支
配していますのが、この大陸において最大の強国、帝政シイナで
ございます。

そして東部地方には、我が神聖デルタニア皇国を宗主国とする、デ
イトニア大公国、ギルメニア王国の神聖同盟、唯一共和制を布くヒ
ルトス共和国が存在します。

ここまでは以前の授業で講義いたしましたので、本日は主にデルタ
ニア周辺国の地歴などを「

教師は熱心に講義を聞き入る紅星に気を取られ、鈴泉が勉強部屋
を出ていたことに、気が付かなかった。

「五十年の共和動乱、鳳千王の崩御の混乱を衝いて、国内の共和派が建国したのが、このヒルトス共和国です。でございませうので、国民は皆、元々デルタニアの民、それゆえ」

勉強部屋を抜け出した鈴泉は、白の宮の廊下を、お気に入りの黒いイヌのぬいぐるみを抱きながら、とぼとぼと歩く。

けっして豊かでない国情を表すように、黒珠の宮廷はどこも。割かしみすばらしく、手狭で宮仕えの使用人も少ない。

しかも紅星はわざわざ、もっともぼろい宮である「董の宮」を自分の宮にしているのだ。

鈴泉の宮「鳳仙花の宮」は母親が実家に金を出させているせいで、無意味に派手派手しいのとは対照的である。

「はやくせんそうがおわればいいのに…」

ぼそりと呟く、名のように、まるで鈴を転がすような声である。

真名はその者の本質を表す…らしい、本当か嘘かは知らないが、この名前は大伯母、斎の宮、月季が神勅で付けてくれた名前なので、そういうこともあるだろう。

高位の巫女が不在に際に生まれ、付けられた真名はあまりそういうことは無い。

少なくとも、曾祖父火月は「月」のように静かな人だったが、おおよそ「火」などという攻撃的なイメージの人物ではない。（暖かなという意味では有っているが、他に良い真名文字があったはずだ）
曾祖父の顔を思い出し、鈴泉の瞳が潤む。

「せんそうがなければ、おかあさまがあたまひやすまで、はくようにいれるのに…」

鈴泉に関しては、いつそ副都白陽の離宮に移しては？という意見があった。

それを聞いて、内心鈴泉は喜んだ、白陽ならば火月や月梅らが居る。

しかし月梅が対ヒルトス共和国戦争に関して王から一任されたため、白陽は対ヒルトス共和国の司令部になってしまった。

危険と言う理由で、鈴泉の白陽行きは無しになってしまったのだ。

人気の少ない（無論そこに見張りの兵士はいるのだが）廊下を抜け、董の宮の庭園に出る。

薔薇の宮には劣るが、見事な薔薇が咲き誇っている。

「わたしのみやのばらもこれくらいだったらよかったのに…」

鳳仙花の宮の庭園に咲く薔薇は、母親の趣味で、見た目は豪華な種ばかりが植えられ、この種の欠点である、むせ返るような匂いだけ気持ち悪くなってしまう。

鈴泉の理想は、月梅が手ずから育てたという、あの可愛らしいピ

ンクの薔薇。

あるいはあそこの庭師が大切にしている、世界に五鉢しかないという薔薇だ。

(何故か月梅は鈴泉がピンクの薔薇を褒めても、なにやら複雑な表情をしていたが…)

董の宮の薔薇は、双貴帝より真名を賜った薔薇「月季」である。ほとんど面識の無い斎の巫女と薔薇を見比べてみるが、いまいちよくわからず、小さな東屋の椅子の上でごろりと横になる。

「お風邪を召しますよ、鈴泉様」

うとうとしかけた鈴泉に聞きなれた声が、優しく語りかけた。ぱつと起き上がった鈴泉は目を疑った。

白陽にいるはずの、薔薇の宮の庭師がそこに居た。

「こくろー、なんでこんなところにいるの？」

「これは異なことを、庭師が庭園にいるのは当たり前のごとくでございますよ鈴泉様」

「いや、そーゆーことじゃなくて」

ぶんぶんと手を振る。

「さて、皇王の住まいである、宮を『こんなところ』というのもあまりアレでございますよ？」

「や、だから」

「はは、冗談です。姫様の使いで黒珠に來ましたので、ついでに庭園を見て回っていただけです」

誰彼構わず、相手を煙に巻くような言動、相変わらずな男である。

「しかし、鈴泉様がお持ちのイヌのぬいぐるみ、随分とアレなセンスでございますな、私わたくしドン引きですよ？」

最近首都で流行の「ブサ可愛い」という奴の斜め上を、光の速さで駆け抜けている。

一体全体、何処で売っているのだろうか？

「これこくろつって名前」

「ぶっ！」

吹き出した黒狼を見て、鈴泉がけたけた笑った。

ずっとこの機会を狙っていただけに、改心の笑みえあった。

「マクシミリアンにいさまがくれたのよ」

「あー、もしやと思っていました、相変わらずのセンスですか陛下下は」

おそらくこの人形は白宮家のアンゼリカの作品だろう。

あの二人は、このぶっとんだセンスがカンペキにユニゾンしているのだ。

二人は他愛の無い話（黒狼のは専ら主に関する軽口だったので他愛無いという言葉は激しく間違っている気もするが）を続けていると、勉強が終わり、部屋に鈴泉に居ないことに気が付いた紅星が、鈴泉を探している声が聞こえた。

「さて鈴泉様、さすがの私も主の許可無く、庭園に踏み入ったあつては、お咎めを受けるは必至」

いやじゃあ勝手に入るなよ、あとこれっぽちも反省してないな？
と思いながらも鈴泉は、楽しい時間が終わりを告げたことを悟った。

「あまり、力をお使いにはなりませんように、竜眼をお持ちとはい
え、身体に毒でございますよ」

「にいさまがさきにつかってくるんだもん」

「制御は鈴泉様の方がお上手ですからね、まあ紅星様の方がお力は
強いですから、制御しきれないのは仕方ございませんが」

「ようするにケンカするなってことでしょ、うるさいなあ」

お得意のふて腐れた表情で鈴泉は言いながら、黒狼に背を向けた、
先回りして、紅星の部屋で寝ていたことにすればいいだろう。

「それから、鳳仙花の宮の庭師には、土を換える様に言っておきま
した、あの種は土に変えれば、あの匂いは消えますから」

あの薔薇がお似合いの姫君におなりくださいね、その言葉に鈴泉
は、ぱつと黒狼の方を振り向いたが、そこには既に、あの不思議な
庭師は居なかった。

「しんしゅつきぼつ」

後日、ようやく自分の宮に戻った鈴泉は、庭園に入った。

黒狼の助言を聞いたのか、庭園の薔薇からあのどきつい匂いは消
えうせている。

「姫様、危ないぞ」

「でたな、つちのあいしょうもしらないへっぽこにわし」

「うっ、あんなめんどくさい種なんて、枯らせないだけで手一杯だったんですよ！」

まだ歳若い、十代半ばくらいの庭師の少年が反論する。引退した父親の跡を継いだ、新米らしい失敗だったのだろう。

「だまれへっぽこ」

「う…面目ない、ところであの庭師は何者？」

「ねえさまのにわし、ばらのみやのにわし」

「うっそ！まじかよー、あーもつと色々聞けばよかったあああ」

この国、いや大陸一の庭師と会っていながらあああ
と叫びながら、地面で悶絶する少年を、鈴泉はうるんな目で見下す。

「じぶんでしょうじんしろ、へっぽこ」

「ぐっ…俺文字読めないからなあ」

「ならわたしがよんでやるっ、うやまってへっぽこ」

「姫様のお心のままに」

自分とこの少年は月梅と黒狼のような関係になれるだろうか。

いや今は良いかもしれないが、遠からずそんな関係ではいられないだろう。

黒狼という男はあまりにも規格外である。

だがいまくらいはこうして子供らしくして、何が悪いというのだ。紅星のように子供のうちから大人ぶったても、損するだけではないか！

「わたしはわたしのしたいようにするぞ！」

「なにをいきなり・・・だいたい姫様はいつだって我儘じゃあないですか」

「うるさいっ！」

後にシイナの有力王族に嫁いだ鈴泉が、夫を煽ってシイナの国主に即けたりするのは（カンペキに尻に敷いたことも含め）別のお話である…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2931o/>

デルタニア・クロニクル

2010年10月15日05時40分発行